



今から約80年前、日本は世界を相手に戦争をしていました。多くの人が亡くなり、多くの人が傷つき、家も焼かれました。その戦争も終わろうとする頃、日本に2発の原子爆弾が落とされました。広島市と長崎市です。

この原子爆弾は、たった一発で何万という人を殺し、建物を破壊する、とても恐ろしい爆弾でした。77年前の昭和20年(1945年)8月9日、午前11時2分、この長崎の松山町の上空で爆発し、7万人以上の方が亡くなり、7万人以上の方が傷つきました。

松山から近かった城山小学校でも28人の先生方、3名の庁務員さんが亡くなり、当時、城山小に通っていた子どもたち1500人のうち、1400名以上が亡くなりました。一度にたくさんの方が亡くなったため、学校の運動場では、多くの亡くなられた方の御遺体を焼かなければなりませんでした。

戦争が終わっても、学校は壊れたままで、隣の稲佐小学校の教室を借りて授業が始められたそうです。

やがて、生き残った方や遠くに避難して戻って来た人たちによって、長崎が少しずつ元に戻っていきました。2年半後には城山小学校の校舎も建て替えられ、授業を再開することができるようになりました。でも、学校の校庭で遊んでいると、時折どなたかの骨が見つかったり、原爆で溶けたガラス瓶が見つかったりしていたそうです。

今後、こんな悲しい出来事が二度と起こらないようにという思いから、原爆投下から6年後の昭和26年8月8日に、少年平和像が完成しました。校門の前にある少年の像です。

少年平和像ができた翌日の「8月9日」から平和祈念式が始まり、毎月9日に行うようになりました。1年間に12回行ってきて、今年で71年目、今日で第849回を迎えることになります。

多くの亡くなられた方々の魂を納める場所として、原爆(げんばく)殉難者(じゅんなんしゃ)の碑も運動場にあります。平和祈念式では、この原爆殉難者の碑に対して、安らかに眠りくださいという気持ちをこめて黙祷(もくとう)をします。目をつぶり、首から上を前に倒して願う仕草です。

そして、少年平和像へは、「今後、原子爆弾のような核兵器を使わせません」「自分たちも平和になるよう行動します」という誓いの気持ちで深くお辞儀をします。これを拝礼(はいれい)といいます。

また、この平和祈念式では、「子らのみ魂(たま)よ」という歌を歌います。

この歌は、昭和26年(1951年)、少年平和像と同じ年、今から71年前に完成した歌です。その後、城山小学校で平和を願い、平和を守ることを誓う気持ちを込めて歌い継がれてきました。

今、この学校に通っている皆さんにも、先輩方の思いを受け継ぎ、「平和は城山から」と、心を入れて歌ってもらいたいと思っています。特に今日は、今年度初めての祈念式です。新しいお友達や新しい先生方、8日に入学したばかりの1年生にも、皆さんの歌声と思いを届けてください。

祈念式の後半は、各学年に分かれて、平和遺構や被爆遺構の前で、亡くなられた方のために花を捧げる「献花(けんか)」を行います。そして、平和な世界にしていくには、どんなふうに行動したらいいかを考える時間をとります。

以上、平和祈念式について話をしてきましたが、最後にもう一つ、内田伯(つかさ)さんという方の言葉を紹介します。内田さんは、平和発信協議会や原爆殉難者慰霊会の会長を長年務められていた方で、城山小の育友会会長も務められたことがありました。内田さんは、ちょうど2年前、4月6日の始業式の日に、90歳でお亡くなりになりました。

もともと被爆校舎は、取り壊されることになっていました。けれども、被爆校舎を残し、平和記念館にしようと活動されたのが内田伯さんです。おかげで、原爆の被害に遭った校舎の一部が残され、多くの方が訪れる平和祈念館となりました。

内田さんの言葉を紹介して、私の話を終わりにします。

それは、こんな言葉です。「目から消え去るものは、心からも消え去る」

被爆校舎を始めとした、様々な遺構(昔の人が残したもの)が消えていく、無くなっていくと、やがて人々の心からも戦争や平和への思いが薄れていくことになる。だから残さなくてはいけない、語り継いでいかなくてははいけないという願いの表れだと思います。

城山小学校で過ごす私たちには、原爆により大きな被害を受けたという事実の継承と、平和への願いを発言すること、そして「平和は城山から」という思いをもつ責任があることをみんなで確かめ、私の話を終わりたいと思います。

このあとの「子らのみ魂よ」では、みなさんの歌声を殉難者の碑や少年平和像まで届けてください。